

《一》次の文章は、伊藤亜紗の『目の見えない人は世界をどう見ているのか』という本の一節である。読んで、後の問いに答えなさい。(字数制限のある問題は、句読点も一字に数えます。)

人は自分の行動を一〇〇パーセント自発的に、自分の意志で行っているわけではありません。知らず知らずのうちにまわりの環境に影響されながら行動していることが案外多いものです。

「寄りかかって休む」という行為ひとつとっても、たいていは寄りかかろうと思って壁を探すのではなくて、そこに壁があるから寄りかかってしまう。子どもの場合は特に、その割合が高くなります。「いたずら」とはたいていそうしたものです。ボタンがあるから押したくなるし、台があるからよじ登ってしまいます。環境に埋め込まれたさまざまなスイッチがトリガーになって、子どもたちの行動が誘発されていきます。

いわば、人は多かれ少なかれ環境に振り付けられながら行動している、と言えるのではないのでしょうか。

あるトリガーから別のトリガーへとめまぐるしく注意を奪われながら、人は環境の中を動かされていきます。人の進むべき方向を示す「道」とは、「こつちに来なさい、こつちに来ようしなさい」と、行為を次々と導いていく環境の中に引かれた導線です。

たとえば京都の桂離宮に行く、その場所どこを見るべきかというまなざしの行方までもが計算されていることに気づきます。人の行動をいざなう「道」が随所に仕掛けられているわけです。実際に訪れてみて、桂離宮というのはまるで舞踏譜のようなだしきりに感心しました。

桂離宮ではひとつの道が明瞭に引かれています。都市においては無数の道が縦横無尽に引かれています。しかもその多くは、人の欲望に強く訴えてくる。

その欲望がもともと私の中にあつたかどうかは問題ではありません。視覚的な刺激によって人の中に欲望がつくられていき、気がつけば「そのような欲望を抱えた人」になっています。

資本主義システムが過剰な視覚刺激を原動力にして回っていることは言うまでもないでしょう。それを否定するのは簡単ではないしするつもりはありませんが、都市において、私たちがこの振り付け装置に踊らされがちなのは事実です。最近ではむしろ、パソコンのデスクトップやスマートフォン画面上に、こうしたトリガーは増殖しているかもしれません。仕事をするつもりでパソコンを開いたら買い物をしていた……よくあることです。私たちは日々、軽い記憶喪失に見舞われています。いったい、私が情報を使っているのか、情報が私を使っているのか分かりません。

こんなふうに、都市というものを、ひとつの巨大な振り付け装置として見てみる。そうすると、見える人と見えない人の「ダンス」の違いが見えてきます。中途失明の難波創太さんは、視力を失ったことで、「道」から、都市空間による「振り付け」から解放された経験について語っています。

「見えない世界というのは情報量がすごく少ないんです。コンビニに入っても、見えたところはいろいろな美味しそうなものが目に止まったり、※キャンペーンの情報が入ってきた。でも見えないと、欲しいものを最初に決めて、それが欲しいと店員さんに言つて、買つて帰るというふうになるわけですね」。

周知の通りコンビニの店内は、商品を配列する順番から高さまで、売り上げを最大化するための「振り付け」がもつともI計算された空間のひとつです。うかうかしていると公共料金を払いに来たのについてプリンを買ってしまったたりする。

ところが難波さんは、見えなくなったことで、そうした目に飛び込んでくるものに惑わされなくなった。つまりコンビニに踊らされなくなったわけです。あらかじめ買うものを決めて、その目的を遂行するような買い方になります。目的に直行するというのがむしろ人間のようですが、むしろ逆でしょう。むしろ個人差はあるでしょうが、見える人の手足が目の前の刺激に反応してつい踊り出してしまふのに対して、見えない人はもっとゆったり、俯瞰的にものとをとらえているのかもしれない。

もちろん、難波さんも失明した当初は情報の少なさにかなりとまどつたと言います。とまどつたというより、それは「飢餓感」と言うべきものだったそうです。

「最初はとまどいがあつたし、どうやったら情報を手に入れられるか、ということに必死でしたね。(……)そういった情報がなくていいやと思えるようになるには二、三年かかりました。これくらいの情報量でも何とか過ごせるな、と。自分がたどり着ける限界の先にあるもの、意識の地平線より向こう側にあるものにはこだわる必要がない、と考えるようになった。さっきのコンビニの話でいえば、キャンペーンの情報などは僕の意識には届かないもので、特に欲しいとも思わない。認識しないものは欲しがらない。だから最初の頃、携帯を持つまでは、心が安定していました

ね。見えていた頃はテレビだの携帯だのずっと頭の中に情報を流していたわけですが、それが途絶えたとき、情報に対する飢餓感もあったけど、落ち着いていました」。

難波さんのこうした心理はもはや「悟り」にすら聞こえます。「意識にのぼってこない情報を追わない」という考えに至るまでの二、三年は、難波さんにとって、視覚を持たない新しい体がとらえる「意味」を、納得して受け入れるまでの期間だったと言っていることができるでしょう。

見えないという条件で脳内に作られるコンビニ空間のイメージは、どうしたって見えていたときに目がとらえていたコンビニの空間とは違います。おそらくは、入り口と、よく買う商品と、レジの位置がマークされた星座のような空間でしょう。

「見えない世界の新人」のうちは、どうしてもこれを欠如としてとらえてしまっていた。しかしⅡ、脳が作り上げたその新しいコンビニ空間で十分に行動できることが分かってくる。そのことに納得して歩くことができたとき、^④踊らされないで進むことの安らかさを、^⑤難波さんは悟ったのではないでしょう。

※・トリガーⅡ何らかの動作を開始するためのきつかけとなる信号や命令のこと。

・桂離宮Ⅱ江戸時代初期につくられた建築。美しい庭園がある。

・デスクトップⅡここでは、パソコンの画面のこと。

・中途失明Ⅱ生まれつきではなく、病気やけがなどで視力を失うこと。

・キャンペーンⅡ宣伝活動。

・俯瞰的にⅡ高いところから見渡すように。

・携帯Ⅱ携帯電話。

問一 空欄Ⅰ・Ⅱに入る最も適切な言葉を次のイ・ホの中から選び、それぞれ符号を書きなさい。

イ 唐突に □ 周到に ハ 乱雑に ニ 次第に ホ 率直に

問二 傍線部①「その割合」とは「何」の割合ですか。本文中の表現を抜き出して答えなさい。

問三 空欄Aに入る最も適切な文を次のイ・ホの中から選び、符号を書きなさい。

イ ふと入った電気店でスマートフォンが格好よく展示されているのを見つけると、ついつい我を忘れて見入って長時間その場所に居座ってしまう

ロ 店頭でヒット曲が大音量で流れているのにつられてCDショップに入ってしまったたり、香ばしいにおいに誘われて思わずうなぎ屋ののれんをくぐったりしてしまう

ハ 真夏のかんかん照りの道にコーラの看板があれば飲みたくなってしまし、「本日三割引」ののぼりを見ればついスーパリーに入って余計な買い物をしてしまう

ニ 家電量販店の店頭ではなやかすぎるポスターを目にし、大勢のお客さんの熱気に接すると、すぐに商品を買うことがなくなつたためらわれてしまう

ホ ふるえるような寒い日に温かいものが食べたいと強く意識しながら歩いていると、ラーメンやうどんの看板がやたらと目についてしまう

問四 傍線部②「軽い記憶喪失」とはどういうことですか。四十文字以内で説明しなさい。

問五 傍線部③「むしろ逆でしょう」とあるが、「逆」にどのようなものであるというのですか。最も適切なものを次のイ・ホの中から選び、符号を書きなさい。

イ 全ての刺激に対し一つ一つ時間をかけて判断し、目的を果たしているということ。

ロ 手に入れたものに集中し、その他の情報は意図的に取り除いているということ。

ハ 目的への「飢餓感」に踊らされず、落ち着いて物事に取り組んでいるということ。

ニ 目的を注意深く観察した上で、綿密に分析し判断してから行動に移るということ。

ホ そばにあるものに影響されないで、目的を意識し冷静に行動しているということ。

問六 傍線部④「踊らされないで進むこと」とあるが、それはコンビニにおいてはどのようにすることをいうのですか。六十字以内で説明しなさい。

問七 傍線部⑤「難波さんは悟ったのではないでしようか」とあるが、「悟った」とはどういうことですか。視覚を失った後、「難波さん」の考えがどのように変化したのかをふまえて百二十字以内で説明しなさい。

(四十五点)

《二》次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。(字数制限のある問題は、句読点も一字に数えます。)

孝俊、保生、タオ。おれたちは四人で一緒に遊ぶようになった。おれはそれがうれしくて仕方ない。島の中二男子は、おれたちしかいないのだ。みんなで仲よく過ごしたい。

保生の特訓で、タオは足ひれがなくても泳げるようになり、宗見港の飛び込みポイントでは、頭からの飛び込みができるようになった。すごい進歩だ。タオは慎重派だけど好奇心旺盛で、飲み込みが早かった。

夏休みの宿題を、タオの家でみんなでやろうと言い出したのは孝俊だ。※アンナに会いたいという魂胆は見え見えだったけれど、一人でやつてもちつとも進まないから、その提案にはおれも保生も大賛成だった。

「いらっしやい」

と、アンナが出迎えてくれたときの孝俊の顔は、一生忘れないだろう。今にも泣き出しそうな、苦しそうな、それでいてうれしそうな、これまで見たことのない表情だった。

以前タオのお見舞いで訪れたときより、家のなかは片付いていて広々として見えた。積み重なって、今にも倒れそうだった本はちゃんと本棚に収まっていたし、それになんだかいじいしがした。

「みんなでそろって宿題やつてるのね。えらいわ」

アンナがジュースとお菓子を持ってきてくれた。孝俊はひそかに顔を赤くして、そのわりには、

「ありがとうございますっ」

と、一人だけやけに元気よくお礼を言ったりした。それなのに、ジュースのおかわりが欲しくても自分から言い出せず、お前が言つてよーと、おれや保生に頼むのだ。まったくわけがわからない。代わりに、タオがジュースのおかわりを運んでくると、

「あい、タオが持つてくるんかー。なんでわからんかなー。もうちょっと気い利かせればいいのに。アンナさんと話できるようにしないとー。あのより、恋する人間は繊細なんだよ。そのくらいわからんと。頼むさー」

などと言い、おれたちをへいこウさせた。①繊細さを求められても困る。

「恋してる人って、ばかみたいだね」

タオがぼそつと言い、おれと保生が笑いを噛み殺していると、

「まったく、無邪気な君たちがうらやましいよ」

と、大人ぶった言い方で②頭を振るのだった。

タオは数学が得意で、おれたちはタオが解いた問題の答えを、せっせとノートに写した。タオにとっての数字は、勉強というより遊びのようだった。おもしろそうに、どんどん問題を解いていくさまは、尊敬以外のなにものでもない。タオを見ていると、つくづく人間というのは不公平にできていると思う。頭のなかがどうなっているのか、見てみたいものだ。

自由研究については、おれと孝俊と保生でチームになって、ひとつの研究をすることになった。「十円玉をきれいにしよう！」という題名だ。いくつかの洗剤、調味料などで実験する。小学生レベルの簡単な自由研究だけど、まあいいだろう。

タオも誘ったけれど、タオは他にやりたいことがあると言って参加しなかった。聞けば、※ドゥヤーギーのことを調べたいらしい。これにはたまげた。ここで生まれ育ったおれたちには、考えられない自由研究だ。

「読書感想文は、どうする？」

孝俊が言い、まだ本も読んでないや、と保生がつぶやいた。

「おれはもう書いたよ」

「ぼくも終わった」

おれとタオが言うと、孝俊と保生は目を輝かせた。

「征人は作文が得意だからな」

孝俊が言い、

「でも、これは丸写しはできんよな」

と、保生が言った。

「とりあえず本の内容を教えてもらってから、征人とタオの感想文読ませて。あとは適当に写してつなげれば、本読まなくても大丈夫じゃないか？」

感想文を読ませるのはちよつと気が引けたけど、おれの見せれば、タオの感想文も読めると思つてオーケーした。課題の本は一冊だったから、ざつとあらすじを教えてあげた。タオは話すのが面倒くさいのか、おれの話のところどころなずいていただけだった。

続いて、孝俊と保生は黙々と人の感想文を読んだ。二人とも真剣だ。これほど集中できるなら、さつさと本を読めばいいのと思う。おれはタオの感想文を読みはじめたけれど、タオはおれの感想文にはまったく興味を示さずに、おじさんの難しそうな本をめくっていた。

ひと足先にタオの感想文を読み終えたおれは、しばし^{II}カタまって、それから頭のなかを整理した。タオの感想文には、おれとまるで正反対のことが書いてあった。

「えー、これ。二人ともまったく違うこと書いてあるけど……」

おれとタオの感想文を読み終わった保生が言った。

「ほんとだ、ぜんぜん違うな」

孝俊も首を傾げる。

本のおおまかな内容は、家出をした主人公アキラの二日間の冒険物語だ。アキラとはあまり気の合わない、クラスメイトのユタカもひよんなことから行動を共にすることになる。

アキラは自由奔放でやんちゃ、感情的で後先を考えない直感タイプ、ユタカは怖がりで引込み思案だけど、やさしくて正義感が強い。最初のうちは、アキラのあとをユタカがついて行き、尻拭いをさせられることが多かったけれど、いつのまにか二人で協力し合うようになる。

アキラは、ユタカのアイデアでさまざまな^{III}キキを乗り越えられたし、ユタカも、アキラの行動力に^{IV}触発されて、物怖じしないで自分の意見を言えるようになる。二日間で二人の間には絆ができ友情が芽生え、アキラとユタカは大きく成長した。そういうお話だ。

おれは、主人公のアキラよりもユタカに感情移入した。家出を自分のせいにされてしまったり、アキラの嘘によって、窮地に立たされる場面もあったけれど、ユタカはくじけなかった。おどおどしているけど、いつでも正直で思いやりがあった。こんなふうに友達のために振る舞えたら、と憧れた。だからそう書いた。

それなのにタオの感想と来たら、ユタカのことをまるで悪者扱いだった。ユタカのせいで、せっかくの家出は台無しになったと書いてあった。アキラの行きたいところにも行けず、ユタカの余計なおせっかいのせいで、いくつかのチャンスをものにできなかったとあった。

かといってアキラに肩入れしているわけではなく、アキラへの批判もたくさん書いてあった。アキラの行動力はいいけれど、もっと強く意志を持つべきで、一人で家出を遂行するべきだとか、器物^{IV}ハズンはやりすぎだとか。

——ユタカのおせっかいにはうんざりしました。ユタカはアキラの個性をもっと尊重すべきだと思います。今度はアキラだけの、家出の冒険を読みたいです。そしてアキラには少し痛い目にあつてもらつて、慎重な人間になることを覚えてもらいたいです。次回をもっと計画的な家出を期待します。

最後はそう締めくくつてあった。

これを読んだときのおれの気持ちをなんて言つたらいいのだろう。すうっと血の気が引いて、今いる場所からぐんと一段さがったような気がしたのだった。正直、^③「やられた」と思った。タオが書いたようなことは、ひとつも思わなかったくせに、タオの感想文のほうが正しいような気がしたのだった。

先生たちが好むような書き方を、無意識にしていた自分はずかしかった。もう一度本を読み直して、感想文を書き直したいと思つた。

「これ、どっちを参考にすればいいんか」

孝俊が頭を抱え、おれとタオに質問したけれど、タオはまるで他人事で、さあ、と言うばかりだ。おれも、タオの感想文を読んだ今となつては、あれほど明確に見えていた登場人物の輪郭がまるでインキキミたいに思えて、説明などとてもできなかった。

「自分で読むしかないんじゃないか」

「はー!?」

保生の言葉に、孝俊は「食い下がったけれど、おれも読むことを勧めた。勧めたくせに、保生と孝俊が、タオのように感じたと思うと、とてもあせった気持ちになった。」

「本は自分で読まなくちゃね」

ふすまが開いてアンナが出てきた。話が聞こえていたのだろう。

「もちろんです! 読みます読みますっ。これから読もうと思つてたんです!」

孝俊の返答には呆れたけれど、まあいい。自分で読むべきだ。

アンナに、おれとタオの感想文がまったく異なることを聞かれたと思うと、冷や汗が出そうになったけど、アンナは本を読んでいないのだから、どういうところが違うのかわかるはずがないのだと思ひ直し、ムネをなでおろした。

それよりもおれはさつき、孝俊がアンナに恋をしている気持ちについて語っていたことが気になった。もしかして全部アンナに聞こえていたのではないだろうか。

けれど、孝俊はそのことについては、特に気にしていないようだった。次から次へとアンナに話しかけては、うれしそうに目尻を下げている。デレデレしすぎて、見ていられない。

タオの家には、英語で書かれた古い本や、布表紙の難しそうな本がたくさん並んでいた。なかに、自分にも読めそうな小説が何冊あった。おじさんはいなかったけれど、アンナがどれでも持つて行つていいのよと言つてくれたので、おれは読みやすそうな一冊を借りていくことにした。小説なんて、宿題以外でわざわざ読む気はしなかったけれど、^④タオの感想文を読んだ今、読まずにはいられないような気分だった。

(柳月美智子『14歳の水平線』より)

※・アンナはタオの姉。

・ドウヤーギー島に生息しているといわれる妖怪。

問一 二重傍線部ⅠⅡⅢⅣⅤのカタカナの語を漢字に改めなさい。

問二 波線部AⅠCの文中での意味として、最も適切なものを次のイⅠⅡの中からそれぞれ選び、符号を書きなさい。

A「魂胆」		B「触発されて」		C「食い下がった」	
イ	必死さ	イ	影響を受けて	イ	交渉した
ロ	願いごと	ロ	ひどく感心して	ロ	落胆した
ハ	悪あがき	ハ	考えを正して	ハ	抵抗した
ニ	恋心	ニ	あきれ返つて	ニ	激怒した
ホ	たくらみ	ホ	おじけづいて	ホ	絶句した

問三 傍線部①「繊細さを求められても困る」とあるが、「繊細さを求め」とはこの場合どういうことですか。最も適切なものを次のイⅠⅡの中から選び、符号を書きなさい。

イ 孝俊はアンナにジュースのおかわりをお願いしたいのだが、自分から言うのは申し訳ないと思つているのだから、周囲の者たちが気を利かせて、早く運んでくるよう、それとなく言つてほしいということ。

ロ 孝俊はアンナに恋心を打ち明けたと思つているのに、なかなか言えなくて困つているのだから、周囲の者が気を利かせて、孝俊とアンナが二人つきりになれるよう、良い知恵を出してほしいということ。

ハ 孝俊はアンナに真面目な人間だと思われたくても、皆が笑い出すと誤解される可能性があるのだから、周囲の者たちが気を利かせて、アンナの前では真剣に勉強している雰囲気を保つてほしいということ。

ニ 孝俊はアンナと話したいと思つていても、恥ずかしくて自分からは上手に言い出せないのだから、周囲の者たちが気を利かせて、孝俊とアンナが自然に話せるよう、細やかに気配りしてほしいということ。

ホ 孝俊はアンナと話したくて必死のあまり完全に舞い上がっているのだから、周囲の者たちが気を利かせて、孝俊がわけのわからぬ言動をしてアンナにあきられられないよう、見張つていてほしいということ。

問四 傍線部②「頭を振る」とあるが、このしぐさで「孝俊」はどのような気持ちを示そうとしているのか、最も適切なものを次のイ～ヘの中から選び、符号を書きなさい。

- イ 繊細な恋心を周囲にわからせるため、格好よく振る舞いたいという気持ち。
- ロ 恋する人間に協力しないなら、もう友人として信用できないという気持ち。
- ハ 恋している自分はまだ大人なのだから、いばつても構わないという気持ち。
- ニ 恋をする自分は確かにばかみたいだと、友人たちの意見に同意する気持ち。
- ホ 自分の恋心を理解できない友人たちの幼さが信じられず、あきれる気持ち。
- ヘ 恋をすることの大変さを実感し、今さらながら途方にくれてしまう気持ち。

問五 傍線部③「『やられた』と思った」のはなぜですか。百字以内で説明しなさい。

問六 傍線部④「タオの感想文を読んだ今、読まずにはいられないような気分」になったのはなぜですか。文章全体をふまえて八十字以内で説明しなさい。

(四十点)

《三》 次のⅠ・Ⅱの問いに答えなさい。

Ⅰ 次の傍線部①～⑤のカタカナの語を漢字に改めなさい。

二〇一五年の「今年の漢字」は「安」だったが、むしろ昨年は「不安」を感じることもの方が多かったのではないか。例えば、火山活動が活発になる ① チョウコウが、各地で見られたこと。 ② ダントウといわれている状況は、異常ではないのか、ということ。難民が増加したヨーロッパ各国がこの事態をどう收拾すべきか、明確な ③ シンを示すのは難しいということ、などなど。

いろいろ挙げればきりが無いが、活躍が認められ、名前の一字が「今年の漢字」に選ばれるほど人気を ④ ハクしたお笑いタレントは、今年もその人気を保つべく、どのように ⑤ フンキするかということも、個人的には気になっている。

Ⅱ 次の⑥～⑮の傍線部のカタカナの語を漢字に改めなさい。

- ⑥ 厳重なケイビをいかくぐって建物の中に忍び込んだ。
- ⑦ 今年の元日もサンバイに訪れた人々でどこの神社もごったがえした。
- ⑧ 工場のキボを大きくしたいと考えている。
- ⑨ 物事のヒソウしか見ていない彼の発言は誰にも支持されなかった。
- ⑩ 九州には神の子孫がコウリンしたといわれる地がある。
- ⑪ 浮世絵は高度なギゲイを用いて作られた。
- ⑫ テンシュカクは意外に質素であった。
- ⑬ 試合後半、急に仲間達のハタイロが悪くなった。
- ⑭ 事実かどうかのケンショウは確実に行うべきだ。
- ⑮ 祖父はロウロウとした声で詩を吟じた。

(十五点)

[illegible]